

「人はパンだけで生きるものではない」

(マタイ4:1～11)

挽地茂男

2020.1.19 日本基督教団千歳丘教会礼拝

今日の聖書箇所は、イエス・キリストの生涯の転機を標す重要な出来事を伝えています。イエス・キリストの生涯の転機(ターニングポイント、分岐点)はいくつかあります。ヨハネから洗礼を受けたとき。フィリポ・カエサリアでペトロが主イエスをキリストと告白した信仰告白の時、また主イエスが山上で白く輝く姿に姿を変えた「キリストの変容」の時(マタ17:1-13)、そしてダビデの子としてエルサレムに凱旋入城した時など幾つも数えられますが、その中の一つに数えられるのが今日の荒野の誘惑の出来事です。

キリストの試練、試練は英語ではテストですから、それは主イエスの公の生涯および宣教活動に先立つ試験でもあったわけです。

「キリストの誘惑」の出来事は、三つの場面で構成されています。まず第一場面は、誘惑の舞台となる荒野に続く「荒野への道」(v.1)の場面です。歌舞伎で言えば、主人公が花道を通して舞台に登場す

る道行きの場面です。そして第二、第三の場面は、物語の舞台となる「荒野」に移ります。第二の場面は、荒野で繰り広げられる悪魔と主イエスのやり取りの場面、「悪魔との対決」の場面です(v.2-10)。そして第三場面は、悪魔の誘惑を終えて、荒野で天使が主イエスに仕える場面です(v.11)。



まず第一の「荒野への道」行きを記した1節。

4:1 さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒

れ野に行かれた。

主「イエスの誘惑」の物語の位置を確かめておきましょう。誘惑は「主イエスの洗礼」(3:13-17)の直後に起こっています。洗礼を受けてヨルダン川から上り、父なる神が「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(3:17)と主イエスが「神の子」であることを宣言した直後に起こっているのです。そしてこの洗礼の際に、主イエスに聖霊が下ったと記されて

います。3章16節。

3:16 イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。



つまり誘惑や試練は、神からの霊的祝福を受け、神との愛が確認された後に、神の愛を前提として起こっているのです。しかも、この誘惑は、神の“霊”に導かれて起こります。1節はそう伝えます。

「イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた」。

それゆえ、誘惑それ自体は悪いことではないのです。神さまの試練は試験なのです。マタイによる福音書では、この試練が試験であ

ることの側面をよく示しています。2節の「そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた」という言葉からすると、福音書記者マタイは、この「荒野での試練」が、主イエスが〔荒野で過ごした〕修業時代を総括する出来事を示していると考えているとも思えます。〔「断食した」はマタイにだけ見られる表現、マルコとルカにはない〕。〔その修業時代は、洗礼者ヨハネから洗礼を受けて彼の弟子として過ごした修業時代だと言われます。洗礼者ヨハネはユダヤ教の中のエッセネ派属していて、ヨハネから洗礼を受けたイエスも、エッセネ派に属していたと考える研究者もいます。〕

誘惑するという言葉（ペイラゾー）は「失敗をするかどうかを試す」「試みる」「試練に遭わせる」という意味と同時に、「おびき寄せる」「誘惑する」という意味があります。また悪魔（ディアボロス）は、「神を人に誹謗し、人を神に訴え、責める者」という意味があります。試練は、言葉や思いをかき乱し、神に対する信頼を揺さぶり、神にある平安を奪い、時に罪に誘うのです。しかしそれは、

神さまの試験という一面をもっているのです。ですからそれには目的があり、成長が必要なときは必ず試練がやってくるのです。試練は訓練と成長の時という一面を持つのです。この試練は「“霊”に導かれて」始まりました。荒野に続く道に導いたのは、神の“霊”なのです。ですからこの道〔試練・試験〕は徹底して聖霊の導きに従うことによって導かれ、通過されるのです。これが神様の試験に向かうための「傾向と対策」なのです。他に対策はないのです。試練の時は、聖霊に従う訓練の時でもあるのです。試練の時は、聖霊の働きを知るときでもあるのです。まさに、宣教生涯を目前に控えたイエス・キリストの生涯の分岐点（ターニングポイント）を示す出来事だったのです。そしてこの訓練の後、荒野を出て、主イエスは宣教活動に乗り出すのです。荒れ

野から社会へ、人里離れた荒野から、人々の生活する空間へ。深い祈りから行動へ〔宣教へ〕と移っていったのです。

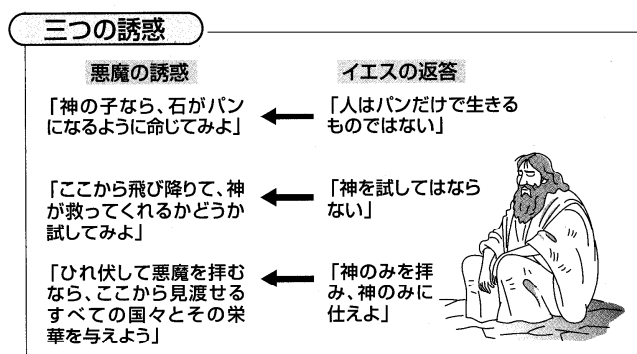


さて荒野での断食の後、空腹を覚えると、そこに悪魔がやって来ます。そして三つの誘惑(試験)を主イエスに試みます。2－10節です。

第一の誘惑は「パンの誘惑」です。2－4節。

4:2 そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。4:3 すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」4:4 イエスはお答えになった。『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』／と書いてある。」

疲れ切ったイエス・キリストの許に誘惑者がやってきます。主イエスは、四十日間の断食〔修業〕を終えて、空腹を覚えられました。



モーセも、シナイ山で神様から律法を授けられるときに、四十日四十夜、断食しています（出34:28）。またイスラエルの民は四十年荒野をさまよい飢えと渴きを経験しました（申8:2以下）。さらにまたエリヤは、四十日四十夜、神様の備えてくださった食べ物を食べて、神の山ホレブを歩き続けます（列上19:8）。つまり「**四十**」は試練の期間を表す数字なのです。それゆえ、教会の暦では、復活祭（イースター）の46日前の水曜日（灰の水曜日）から復活祭の前日（聖土曜日）までの期間のことを「受難節」と呼ぶとともに「四旬節」〔しじゅんせつ。[ラ]Quadragesimaは、カトリック教会などの西方教会において〕と呼びます。それは、この46日から日曜日を除くと、40日となるからです。「**四十**」は試練の期間、キリストの試練を覚えつつ、わたしたちの人生の試

練・試験に備える期間でもあるのです。

主イエスに試練が与えられたタイミングは、四十日四十夜の断食〔修業〕を終えて、主イエスの公生涯の成長・発展の段階を目前にした時でした。試練〔試験〕はその後のキリストの生涯にとって不可欠であったのです。試練〔試験〕はわたしたちやわたしたちの教会の成長・発展にとって不可欠の場合もあるのです。

さて主イエスは、ここでどのような試練を受けているのでしょうか。誘惑の内容（何が試されているのか）を見てみましょう。悪魔は「**神の子なら**」と言葉を切り出します。「もし本当に神の子なら」、これは**神の子の証明**を要求する誘惑なのです。主イエスは洗礼を受けた際に、天からこのような神の声を聞いたのでした。3章17節。そのとき、「これはわたしの愛する子〔つまり神の子〕、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

「もし本当に神の子なら」「石をパンに」できるはずだ、と悪魔は迫ってきたのです。神の子に空腹など、解決するのに何の苦勞もな



いはず、だと悪魔は迫っているのです。しかしこの空腹〔飢え〕には意味があります。ここでは、**飢えの解消が**〔神の子には容易なことだが、むしろ神の子だからこそ、また奇跡を行うことが可能だからこそ（5000人の供食の奇跡）〕**優先されるのではない**のです。主イエスの回答を見てみましょう。

「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』／と書いてある。」これは、申命記8章3節の言葉です。40年の荒野の旅の終えて約束の地に入っていく直前にモーセがイスラエルの民に語った言葉です。

主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることがあなたに知らせるためであった。



パンと石

この言葉は、神がイスラエルの民を「**苦しめ、飢えさせ**」

たのは、彼らが、「**人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きること**」を学ばせるためであったと告げます。満ち足りたパンの中で、神への信頼も、貧しい人々への配慮もなく、横柄に富を満喫する人は少なくないのです。パンは神様が与えてくださる賜物です。そして同時に、空腹〔飢え〕は、人がパンだけで生きる存在ではなく、神の口から出る言葉によって生きる存在であることを教える〔**人が神への信頼によって生きていること、神への依存性を教える**〕のです。

主イエスの答えにはもう一つ大切な特徴があります。それは「…と書いてある」という言葉が表しているように、主イエスが聖書を用いて悪魔に対しているということです。しかも「…と書いてある」（ゲグラプタイ）という言葉は、この動詞（グラフォー）の完了受動態で「書かれている」となっています。ギリシア語の完了形は、**過去に書かれたことが今も生きて働いていることを強調する表現**なのです。かつて旧約の時代に書かれたことは、今もわたしたちの生活の

中で働き続けるのです。そしてその神様の言葉への従順こそが真の生きる道だということなのです。



さて第二の誘惑を見てみましょう。5－7節です。

4:5 次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神

殿の屋根の端に立たせて、

4:6 言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、／あなたの足が石に打ち当たることのないように、／天使たちは手であなただを支える』／と書いてある。」
4:7 イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。

また誘惑は「神の子なら」という言葉から始まっています。場所が移動しました。悪魔は神殿の屋根の端（上）に主イエスを立たせます。宗教的な優越の位置です。精神的誘惑がイエスを襲います。宗教的、精神的、霊的経験の頂点に立たせる（と俗人は有頂天になる）のです。「有頂天」とは元々仏教

の用語で、「欲界」「色界」「無色界」という三界〔これをもって「女には三界に家なし」と言った〕のうちの「無色界」〔色は、色のついているもの、物質的世界の総称。無色は非物質的〕つまり精神的世界の最高の場所（天の中の最高の天）を意味します。そこは、人間の宗教的営みを見下ろせる場所です。有頂天になると、人は、全能感や、万能感に満たされます。宗教的実験、宗教的ギャンブル（ばくち）さえ試みることがあります。「神の子なら、飛び降りたらどうだ」。これが神の子であることを証明する、最高の立証となり、信仰の確信を与えと思わせるのです。このよう

なしるしを求める信仰は聖書の信仰ではありません。しかし悪魔は聖書（詩91:



11-12) を用いて、神の子イエスを誘惑しています。主イエスが「パンの誘惑」のところで、「…と書いてある」と切り返したからです。「神があなたのために天使たちに命じると、／あなたの足が石に打ち当たることのないように、／天

使たちは手であなたを支える」と書いてある、と悪魔も聖書を使って応戦します。ルターは「悪魔の道具は、神の言・信仰深さ・文化・宗教・奇跡である」と語っています。一見良いと思えるものが、誘惑の種となるのです。

ここでは何が試されているのでしょうか。誘惑の内容は、「もし本当に神の子なら」と、神の子であることの証明を要求する誘惑であることは第一の「パンの誘惑」と同じです。主イエスの回答はやはり、聖書を用いてなされます。

「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」(7節)。これは、申命記の申6章16節です。旧約本文ではこうなっています。「6:16 あなたたちがマサにいたときにしたように、あなたたちの神、主を試してはならない」。主イエスはこの悪魔の誘惑に、かつてイスラエル民族がマサで主を試みた、その同じ試みが潜んでいるのを見たのです。モーセに導かれたイスラエルの民は、喉の渇きに苦しみます。マサという地に来たときでした、イスラエルの民は、神が自分たちを神の民として扱ってくださるなら、自分た

ちの渇ききった喉を潤す水を、出してくれてもいいのではないか。彼が本当に神ならば、そして本当にわたしたちが神の民ならば、そうなるはずではないのか、と憤懣をモーセに爆発させます。しかし神が共にいて神の民を、つまり神を父と呼ぶ神の子たちを守ってくださるかどうかは、水が出るか、飛び降りても支えられるか、という不敬虔な実験によって立証されるものではないのです。それは信頼と従順の中に見出され、体験されるものなのです。そしてそのことも「…書いてある」のです。今も神の言葉は生きて働いているのです。

第三の誘惑です。8－10節。
4:8 更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、
4:9 「もし、ひれ伏してわたしを



拝むなら、これをみんな与えよう」
と言った。4:10 すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、／ただ主に仕えよ』／と書いてある。」

もちろん高い山は象徴的な意味があります。それは支配の頂点を表しています。ここでの誘惑で試されているのは、政治的支配、権力によって主権を確立するあり方です。それは、**苦難の僕の道を拒否**するあり方です。悪魔は「この世の支配者」と呼ばれます（ヨハネ12:31, 16:11）。これにひれ伏すことによって支配を獲得するという論法です。

主イエスの回答は、またしても、聖書によってなさ



れます。申命記 6 章 1 3 節です。

6:13 あなたの神、主を畏れ、主にのみ仕え、その御名によって誓いなさい。

わたしたちがひれ伏し、仕えるべき方はただ一人、わたしたちの主なる神なのです。

エフェソの信徒への手紙 6 章 1

1 - 1 7 節は次のように、悪魔の挑戦に備えるように教えます。

6:11 悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。

戦いは悪魔との戦いなのです。例えば、人と論争をしても、人に勝つことが最終目的ではないのです。わたしたちは往々にして闘う相手を間違えるのです。**議論に勝って、悪魔に負けていることさえあるのです。**続けましょう。

6:12 わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。6:13 だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。6:14 立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、6:15 平和の福音を告げる準備を履物としなさい。6:16 なおその上に、信仰を盾として取りなさい。それによって、悪い者の放つ火の矢をことごとく消すことができるのです。6:17 また、救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。

主イエスは見事に「**霊の剣、すなわち神の言葉**」で悪魔に勝利しました。すると、荒野に天使が現れて、主イエスに仕えます。11節。

4:11 **そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。**

誘惑の後には祝福が訪れるのです。

「**悪魔は離れ去**」りました。「**天使たち**」は神の祝福そのものです。

み言葉に従うとき、悪魔自らが、離れ去り、消えていくのです。そして、そこに天使が、祝福が訪れます。わたしたちは聖霊に導かれて生きていくのです。その導きの先に、新しい世界が開けてくるのです。み言葉はわたしたちの人生の道しるべ・生きる力・勝利の先取り・希望です。人生が悪の力、誘惑に押しつぶされないために、み言葉を信じましょう。み言葉が私たちを活かし、わたしたちをしっかりと立たせるのですから。神さまがご自身の聖なる御名の内にわたしたちを守り、来たる1週間も御心にかなった精一杯の

1週間でありますように、祈りましょう。

2020.1.19 日本基督教団千歳丘教会礼拝

